

## 妻を探して羅津から撫順へ

鳥取県 岸本 諒 二

満州は日本の生命線。人間到る処に青山有り。など少年の純な気持ちを胸に中学校を卒業すると同時に満鉄の入社試験に挑戦。合格して昭和十二年五月二十日付で北鮮鉄道事務所清津駅勤務を命ぜられ、社会生活へ第一歩を踏み入れた。しかし東垂の情勢は日に日に悪化。中国大陸では芦満橋事件に端を発した支那事変がはじまり、翌年七月には張鼓峰事変が発生、いよいよ騒然たるものを感じさせる情勢であった。昭和十六年、羅津埠頭旅客係を拝命。戦局は中国全土から南方へと発展、ますます時局の緊迫化を覚えされつつあったが、はたして十二月八日、大東亜戦争に突入した。

当時私は、結婚、満鉄社宅の貸与を受け、同所より通勤、旅客主務者として業務に専念していた。

当初ハワイ真珠湾、マレー沖海戦、シンガポール占領

等々、はなばなしの戦果を挙げつつあったが、ガダルカナ島の米軍上陸に始まり、日を追って日本軍の劣勢が現れ、夜間羅津埠頭を経由して関東軍が南方へ輸送されるのを見て心細い思いを抱いたのは私だけではなかったろうと思う。はたして昭和二十年八月一日頃より夜になるとB29が羅津上空に現れ、機雷投下をし始め、ついに八日夜にはソ連機による空襲を受け、九日には召集令状がきた。

私たち夫婦間では、覚悟はできていたので、わりと落ちついた気持だったが、六か月の身重の家内のことを思えば、いささか心配で、種々指示を与え、軍馬補充部の部隊に入隊。機関銃隊に配属され、ソ連軍の上陸作戦に備えて陣地構築をしていたところ、各小隊より二人ずつ斬込み隊員を出せ、との命令があり、私に白羽の矢がたった。斬込み隊員としてソ連陣地に向かったが、ソ連軍と遭遇しないまま終戦となり、武装解除と同時に召集を解除されたのであった。

応召者たちも次々と解除されたが、妻はどこへ行っただのか、まったくわからない。やがて、社員家族は図們経

由で奉天方面に避難したらしいとの情報を得たので、朝鮮人の迫害を避けながら古茂山から茂山、恵山鎮を経由、徒歩で豆満江ぞいに中江鎮まで行き、渡河して、臨江県に到着、そこからさいわいに動いていた列車で通化に行き、社員家族が撫順の国民学校に避難していることをつきとめ、行き別れて一か月目の九月九日、家内と再会することができた。人間の奇しき運命というのだろうか、ただ感無量のものがあった。さいわい撫順は露天掘りをはじめとして、数々の炭鉱、および液化工場等があり、満鉄の街といっても過言ではなく、さっそく炭鉱勤務となり、ソ連軍の命で石炭掘り続け、ソ連軍票による給料を支給された。家内もさいわいにも十二月八日満鉄病院で長男を出産、栄養不良の母乳不足で苦労させられたが、どうにか生き延びられたことは感謝の外ない。そして着のみ着たまま羅津を出たときと同じ姿で、無蓋車に乗せられ、撫順を出発、コ島埠頭から昭和二十一年七月六日舞鶴港に上陸、日本に帰ってきた。満州での苦労、そして同胞のみじめな姿を目のあたりにし、なぜに、どうしてもの感を強くした。内地に引揚げてきても住

むに家なく、食うに職なき状態、良く今まで生きてこられたと感謝の気持ちでいっぱいである。

## 妻死亡、子どもだけの引揚げ

福島県 遠藤 正雄

私は知人の紹介で北鮮の製鋼会社の職工として就職した。日本では給料が安く、生活が容易でないので渡鮮したのだ。昭和十四年五月、家族とともに北鮮で生活を始めた。生活は豊かで、不自由などしなかった。敗戦二年前頃から、急に物資不足になり、内地への交通も絶え、きびしい生活になってきた。

昭和二十年一月、とつじよ軍隊に召集され、釜山部隊に入隊、八月十五日の敗戦、九月召集解除となったが、北鮮には帰れないので、家族を案じていた。知人を尋ねたり、北からくる人びとに聞いてまわり、待っていた。そのうち、米軍に保護され、十月初め、米軍の船で送還、故郷にたどりついた。